

# 文化財 ニュース

28 Autumn 2022



竹久夢二「秋」  
『婦人グラフ』  
大正13年9月号表紙  
大正13年（1924）



## 竹久夢二（1884-1934）

岡山県邑久郡本庄村（現在の瀬戸内市）出身。本名茂次郎。「大正ロマン」を象徴する画家として知られる。夢二が描く女性像は「夢二式美人」と称され、当時の憧れの女性像とされた。また衣類や日用雑貨などのデザインも手掛け、身近な生活に美術を浸透させたことでも評価されている。

## 特集

令和4年度文化財企画展  
**龍星閣がつないだ夢二の心**  
—「出版屋」から生まれた  
夢ニブームの原点—



竹久夢二「港屋絵草紙店」（みなとや版） 大正3年（1914）

## 展覧会情報

令和5年（2023）

**1月7日（土）～2月28日（火）**

※前期：1月29日（日）まで 後期：1月30日（月）から

会 場：千代田区立日比谷図書文化館

開室時間：月～木、土 10時～19時

金 10時～20時 日祝 10時～17時

休 館 日：1月16日（月）、2月20日（月）

観 覧 料：無料

※特に記載がなければ、掲載資料の所蔵は千代田区。

## 特集

# 令和4年度文化財企画展「龍星閣がつないだ夢二の心」

文化財ニュース27号では、新たに区指定文化財となった「龍星閣旧蔵竹久夢二コレクション」を紹介しました。この冬、指定文化財のお披露目を兼ねた企画展を開催します。そこで本号では、一足先に展覧会の見所を紹介したいと思います。

## 夢二ブームを生み出した 龍星閣の出版活動

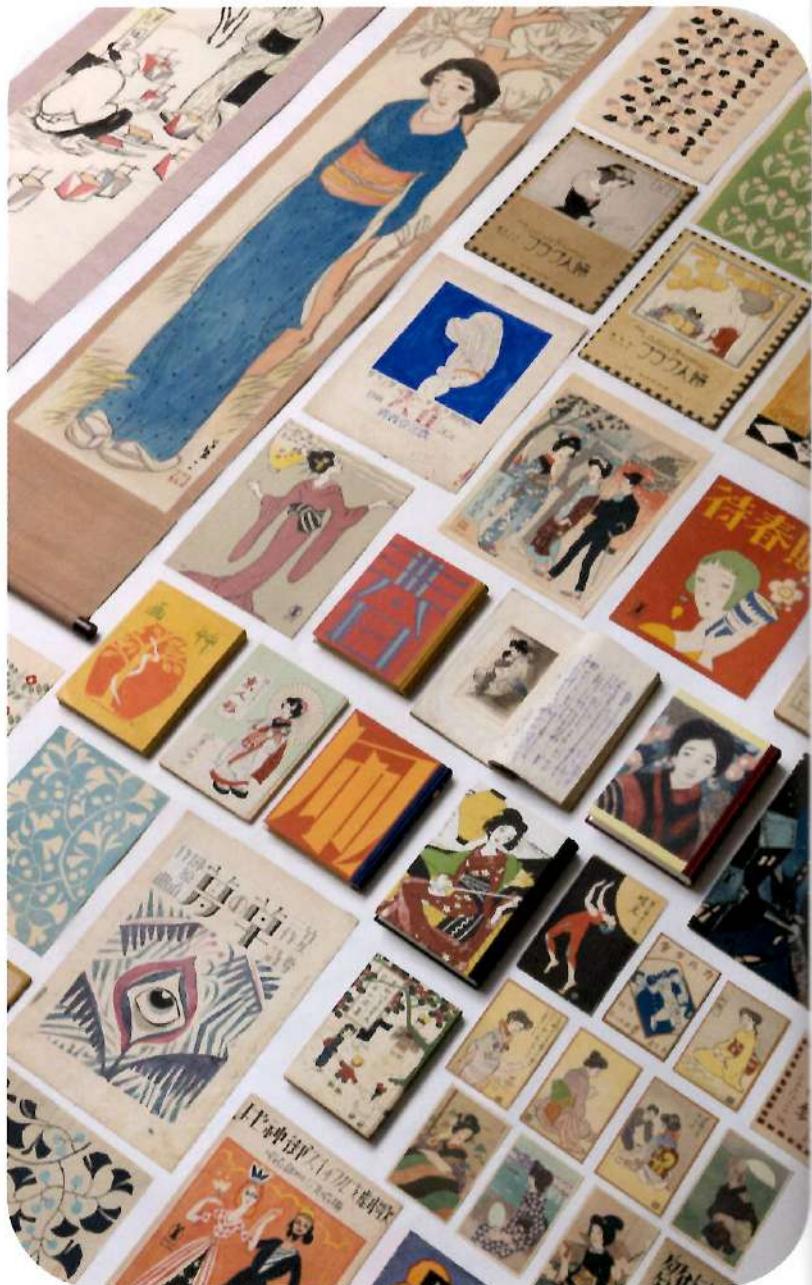
展覧会で紹介する資料の根幹となるのは、元々区内にあった出版社である龍星閣が集めた竹久夢二に関するコレクションです（現在は区所蔵）。

龍星閣を興した澤田伊四郎の出版理念は、「埋もれたもの、独自なものを掘り出して世に送ること」でした。その理念のもと、文字通り「掘り出された」ひとりが、竹久夢二です。没後、一時的に世間から忘れられた夢二でしたが、再び脚光を浴びるきっかけの一つを作ったのが、龍星閣でした。精力的に夢二の作品を収集し、それらをもとに、夢二の作品集をまとめて次々と世に送り出したことで、人々の熱い眼差しが再び夢二に向かされることになりました。

展覧会では、まず夢二復活のきっかけをつくった龍星閣の出版活動に注目します。自らを“出版屋”と称した龍星閣が目指したのは、こだわりの本造りでした。伊四郎は、「造る本には内容にふさわしい立派な装幀造本を与えねばならない」といって、使用する紙など素材から、装幀まであらゆるものに一切妥協しませんでした。今回は、伊四郎の出身地である秋田県小坂町の協力を得ながら、彼がこだわり抜いて作った逸品の本の数々を紹介します。



澤田伊四郎 54歳  
昭和28年頃  
秋田県小坂町立  
総合博物館郷土館所蔵



「龍星閣旧蔵竹久夢二コレクション」



龍星閣が出版した夢二作品集『花のおも影』普及版・特装版・自家愛蔵版  
(昭和44年刊行) 秋田県小坂町立総合博物館郷土館所蔵

## 夢ニブームの原点— 龍星閣の「竹久夢ニコレクション」

龍星閣が収集した夢ニ作品には、多くの貴重なものも含まれていました。夢ニの代名詞である「夢ニ式美人」を描いた作品を含む肉筆12点のほか、『セノオ楽譜』や『小学少女』の表紙絵などの原画もあります。中でも貴重とされるのが、夢ニが最初に作った作品「搖籃」（文化財ニュース27号参照）と、昭和2年（1927）から『都新聞』（現在の東京新聞）に連載された、「出帆」の原画です。これらの作品は、今回の展覧会で公開する予定です。



セノオ楽譜の原画



竹久夢ニ「出帆」原画  
「出帆」は夢ニの自伝的小説であり、彼の絵によって夢ニの半生を知ることができます。

また、多彩なジャンルで構成される夢ニ作品の面白さを知ってもらうために、今回は「女性」「草花」「子供」「船」4つのモチーフの視点から、作品を展示・解説する予定です。

ぜひこの機会に会場に足をお運びいただき、新たに区の文化財となった竹久夢ニコレクションをご堪能ください。

(学芸員 山田将之)

### ● ● 展覧会イベント情報 ● ●

#### 1 展示担当によるギャラリートーク

- 日 時 ① 1月13日（金）18時30分～  
② 1月21日（土）13時～  
③ 2月 4日（土）13時～  
④ 2月10日（金）18時30分～  
会 場 日比谷図書文化館1階 特別展示室内  
参加費 無料  
参加方法 事前申込不要 先着20名まで

#### 2 企画展関連講座

##### ① 「夢ニが表現した“かわいい”と出会う ～龍星閣旧蔵竹久夢ニコレクションより～」

日 時 令和5年1月21日（土）14時

会 場 日比谷図書文化館 小ホール

参加費 500円 事前申込制（葉書・メール）  
定員40人

講 師 竹久夢ニ美術館学芸員 石川桂子氏

##### ② 「龍星閣創業者 澤田伊四郎： 出版にかける情熱」

日 時 令和5年2月4日（土）14時

会 場 日比谷図書文化館 小ホール

参加費 500円 事前申込制（葉書・メール）  
定員40人

講 師 秋田県小坂町立総合博物館郷土館学芸員  
安田隼人氏

※イベント申込の詳細は、文化財事務室へお問い合わせくださいか、広報千代田12月5日号もしくは展覧会ポスター、チラシをご参照ください。

# 日比谷ミュージアムガイド 令和4年度テーマ展 千代田区の煉瓦建築

期間 令和4年10月18日(火)～令和5年2月19日(日)予定  
※休館日：11月21日(月)、12月19日(月)、年末年始

場所 日比谷図書文化館 常設展示室V室(入場無料)

令和4年度のテーマ展では千代田区の煉瓦建築を取り上げます。煉瓦とは、粘土に砂や石灰を加え、形を整え固めた建築資材です。一般的には赤煉瓦を指します。赤煉瓦は幕末に西洋からやってきた、日本にとって新しい資材でした。煉瓦街といえば銀座が有名ですが、明治～大正時代の千代田区内にも煉瓦造りの建物が多数存在していました。本記事では区内の煉瓦建築の流れを、使用された煉瓦の製造所に注目しながら紹介します。

## 明治初期の煉瓦建築

区内で明治初期に建てられた煉瓦建築のひとつがT.J. ウォートルスが手掛けた近衛歩兵第一・第二聯隊兵舎です【右頁①、以下同】。明治4年(1871)に竣工したこの建物で使われた煉瓦【図1】は、刻印から本所・深川付近の複数の瓦職人が焼いたものと推察されます。



【図1】煉瓦の刻印：「本所 / 瓦七 / 横川」

明治5年、丸の内から築地一帯を焼き尽くした、いわゆる銀座大火が起こります。明治政府は街の不燃化のため煉瓦街の建設を決定し、ウォートルスはこれの設計・監督にあたりました。ウォートルスは東京の小菅村に日本で初めて煉瓦の大量生産に適したホフマン窯を築き、煉瓦街建設用煉瓦を大量に製造しました。小菅の煉瓦【図2】は岩崎彌之助邸の擁壁やニコライ堂【②】など、区内でも様々な場所で使われています。そのうちのひとつが三菱一号館【③】です。



【図2】煉瓦の刻印：桜（小菅集治監製）



【図3】煉瓦の刻印：「上敷免製」（日本煉瓦製造会社製）

## 明治中期の煉瓦建築

陸軍が移転した後の丸の内一帯の払い下げを受けた三菱は、そこに大オフィス街の建設を計画します。明治27年(1894)に日本初の洋風オフィスビルディングとなる三菱一号館を建設しました。その後、周辺には同様の煉瓦建築が次々と建てられ、その街並みは一丁倫敦と呼ばれました。

丸の内がオフィス街になったのと前後して、官庁を震が関一帯に集める「官庁集中計画」が実行に移されます。設計を担当したV.ベックマンは良質な煉瓦が大量に必要であると進言し、日本初の機械抜き煉瓦製造工場である日本煉瓦製造会社が設立されました。そこで生産された煉瓦【図3】は法務省旧本館【④】や東京府庁舎【⑤】で使用されました。

## 明治後期～大正期の煉瓦建築と鉄道

都市化が進むなか、問題になったのは交通網です。当時南は新橋、北は上野まで延びていた鉄道を接続させる計画が持ち上がりいました。しかしこの間には市街地が密集していたことから、明治23年(1890)の市区改正で高架によって両者を接続し、間に中央停車場を設けることが決定されました。これにより明治43年(1910)に完成したのが現在の新橋～有楽町間を結ぶ新永間市街線高架橋【⑦】です。大正3年(1914)には中央停車場である東京駅【⑨】が開業しました。なお東京駅を設計した辰野金吾は、三菱一号館を設計し「日本近代建築界の父」といわれたJ.コンドルの教え子でした。

このように明治から大正にかけて街の不燃化や近代化の象徴として建造されてきた煉瓦建築ですが、大正12年(1923)の関東大震災を契機に衰退の一途をたどります。大きな理由のひとつが、地震で多くの煉瓦建築が倒壊し、構造的な弱さが問題になったことです。以降は地震に強い鉄筋コンクリート造りが建築の主流となりました。

震災・戦災でその多くが失われてしまった煉瓦建築ですが、現代でも一部その面影を見ることができます。煉瓦建築が建ち並んだかつての千代田区の姿を想像しながら、街を歩いてみてください。

(学芸員 岩城晴美)

## 千代田の

# 煉瓦建築

## マップ

**1** 近衛歩兵第一・  
第二聯隊兵舎  
ウォーツルス 設計 明治4年竣工



**4** 法務省旧本館  
エンデ&ベックマン設計事務所  
明治28年竣工

**6** 旧近衛師団司令部庁舎  
田村 鎮 設計 明治43年竣工



**2** ニコライ堂  
シチュールボフ、コンドル 設計  
明治24年竣工



**8** 万世橋駅  
辰野 金吾 設計  
明治45年竣工



**9** 東京駅  
辰野 金吾 設計  
大正3年竣工



**7** 新永間市街線高架橋  
バルツァー他 設計 明治45年竣工



**5** 東京府庁舎  
妻木 賴黄 設計 明治27年竣工

# 藤堂家上屋敷と東京医学校

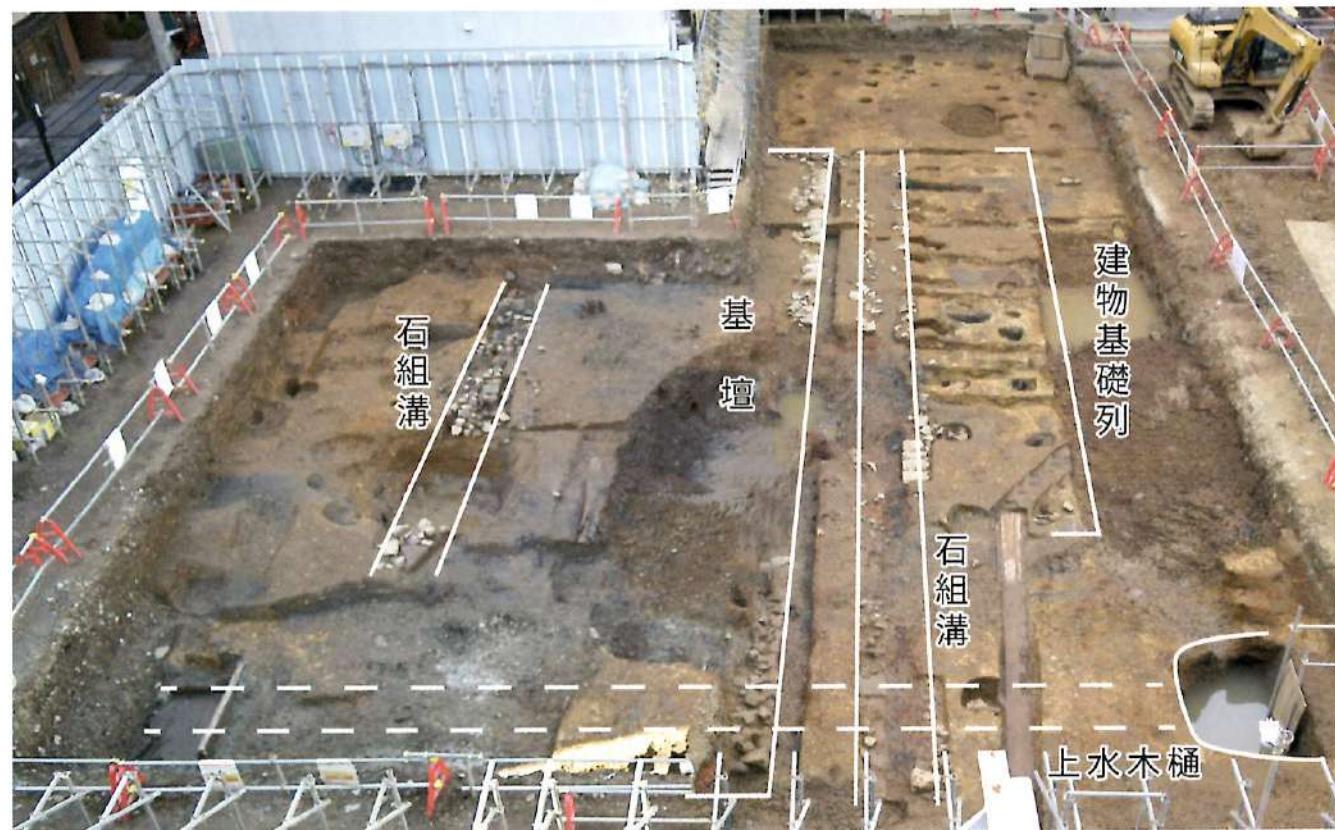
## 藤堂家上屋敷跡の発掘

千代田区北東部に位置する神田和泉町は、かつて伊勢津藩藤堂家の上屋敷が所在した場所に整備された町で、町名の由来は藤堂家藩主が代々名乗った「和泉守」にちなむと言われています。神田和泉町の藤堂家屋敷は、江戸時代はじめの慶長年間頃（1610年頃）から所在し、当初は柳原屋敷などと呼ばれていましたが、明暦年間（1650年代後半）に辰ノ口・御茶ノ水などに設けられた上屋敷が相次いで焼失したのちに明暦4年（1658）から上屋敷に改められ、幕末まで存続しました。屋敷内部の様子については、これまで屋敷絵図などの史料がみつかっていないため詳しくわかつていませんでしたが、令和元年（2019）に実施された発掘調査で建物基礎や上下水に関する遺構が発見され、北側の一部の様子が明らかになりました【図1】。

発掘調査の結果、17世紀初めの藤堂家屋敷の整備時に約1.5m程度の盛土造成を行って、かさ上げしていましたことが分かりました。発掘調査範囲は、初期の段階では建物などがあまり見られない土地利用状況でしたが、明暦4年に上屋敷として改められると遺構の数が増え、詰人空間と呼ばれる家臣たちの生活空間や屋敷の機能を支えるインフラが設けられる空間として整備されたことがわかります【写真1】。また、火災の跡を示す焼土の堆積や、家財道具などを一時的に避難させる際に用いる地下室なども検出され、災害と暮らしの様子を窺い知ることができる成果もあげされました。



【図1】調査地点の位置



【写真1】17世紀後半～末頃の遺構



## 医学校校舎に転用された御殿

神田川以北の外神田地域は、湯島無縁坂の火事（1793）などを契機として18世紀後半ごろから町人地化が進められましたが、和泉橋以東の藤堂家上屋敷を含む一帯は例外的に武家地のまま幕末を迎えることになりました。

藤堂家上屋敷は、明治2年（1869）に東京府によって接収されたのち、東側に隣接していた武家地と併せて東京医学校（のちの東京大学医学部）の校地として用いられます。明治9年（1873）に学校が本郷に移転した後も、東京帝国大学の第二医院として利用が引き継がれています。東京医学校の校舎は、藤堂家上屋敷の建物が一部そのまま利用されており、明治17年（1884）に発行された「五千分一東京図測量原図」には、発掘調査地点の東に屋敷地北辺沿いの長屋が並び、南東には中奥御殿とみられる建物がそのまま残されている様子が描かれています【図2】。

この屋敷を転用した校舎の体験者の一人に森鷗外がいます。鷗外は、明治6年（1873）に11才で東京医学校に入学した後、明治9年（1876）の学校移転までの間、学校内の寄宿舎で生活しました。明治44年（1911）から連載された小説『雁』には、この寄宿舎で学生相手の小使として働いて財をなした末造という人物が登場し、寄宿舎についても次のような描写があります。

まだ大学医学部が下谷にある時の事であった。灰色の瓦を漆喰で塗り込んで、碁盤の目のようにした壁の所々に、腕の太さの木を堅に嵌めた窓の明いている、藤堂屋敷の門長屋が寄宿舎になっていて、学生はその中で、ちと氣の毒な申分だが、野獸のような生活をしていた。  
（森鷗外『雁』）

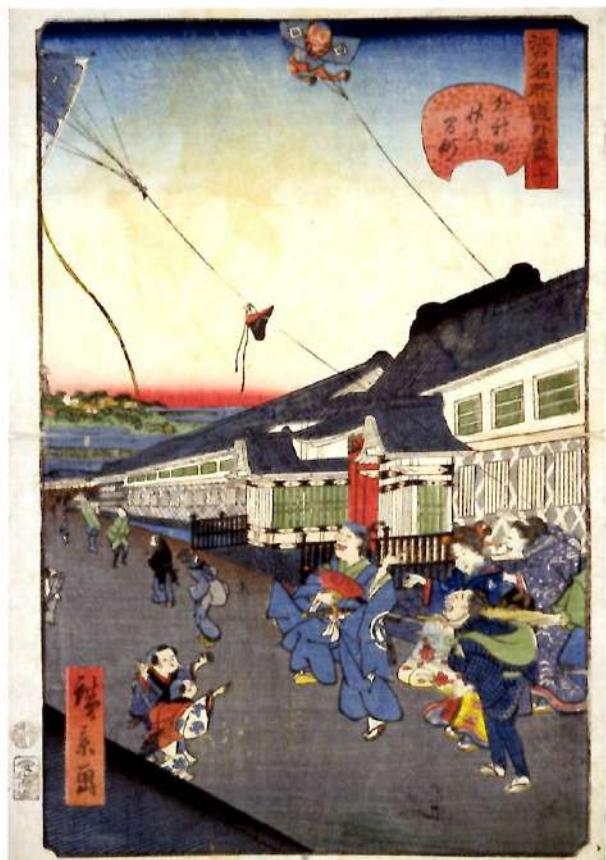
江戸の武家屋敷では、描寫されているように瓦を練り込んで塀を建てるなまこ壁などの技術が用いられていました。発掘調査では屋敷境の門や塀の遺構は検出されませんでしたが、遺物として多量の瓦片が出土しています。また、安政6年（1859）～文久元年（1861）にかけて歌川広景が描いた「江戸名所道外尽」には、外神田佐久間町として藤堂家上屋敷の南辺のものとみられる門や塀の様子が描かれており、鷗外の描写と一致するなまこ壁と格子窓が描かれています【図3】。鷗外は、このような近世的な風景の中で、秀才少年としての学生時代を過ごしたのでしょうか。

屋敷を転用した第二医院は、残念ながら明治34年（1901）にホルマリンランプからの失火で焼失してしまいます。その後、跡地の一部に三井記念病院が創設されて、現在に至っています。

（学芸員 相場峻）



【図2】参考本部陸軍測量局「五千分一東京図測量原図」に描かれた藤堂家屋敷（国土地理院）



【図3】江戸名所道外尽 十 外神田佐久間町 歌川広景（国立国会図書館デジタルコレクション） 藤堂家上屋敷のなまこ壁と格子窓が描かれている

ちよだ歴史文化遺産

# 神田駿河台に残る近代和風建築 - 国登録文化財“高畠家住宅”

※高畠家住宅の内部は非公開となっています



【図1】高畠家住宅外観（神田駿河台四丁目2-9）高層ビルが林立する中に建つ高畠家住宅は、駿河台地域の歴史的景観を守り続けている

今年の6月29日に、神田駿河台にある高畠家住宅が、新たに国登録文化財（建造物）となりました。区内にある国登録文化財（建造物）としては11例目となります。

開発が進む都内にあって、往時の景観を留める高畠家住宅は、区の歴史的景観を今に伝える貴重な文化財です。今回は、区内に誕生したこの新たな文化財について紹介するとともに、国登録の際に行った調査によって明らかになった高畠家住宅の建築年代について解説します。

## 高畠家住宅の歴史

高畠家住宅は、大正末～昭和初期に作られた近代和風建築の一つです。元々株式会社伊勢丹の創業者小菅丹治（1859-1916）の実弟である細田半三郎（1870-1931）が、関東大震災後に隠居所として建てたものでした。半三郎は、昭和6年（1931）に亡くなりますが、建物はその長男昌靖に引き継がれました。高畠家に渡ったのは、それから10年後の昭和16年（1941）のことです。高畠信一郎（1917-1964）が昌靖から譲り受け、そのまま現在に至っています。



## 高畠家住宅の特徴

今回登録となったのは、主屋、正門、塀及び石垣の1件3棟になります。

建物としての評価ポイントは、楼閣風の外観意匠と数寄屋風の室内意匠、そして細めの木割など随所に隠居所らしい落ち着いた意匠表現が見られる点です。



【図2】正門

また大正12年（1923）の関東大震災直後に建てられたことから、小屋裏や床下などの各所に、震災後に個人住宅にも普及した耐震工夫を見て取ることができました。震災によって得られた教訓を生かした建物という点でも注目されます。

### 新事実 高富家住宅の建築年代

従来、高富家住宅の建築年代は、所有者からの聞き取りをもとに昭和5（1930）年頃の竣工と考えられてきました。しかし、今回の調査の際に、小屋裏に取り付けられた棟札が発見され、新たな事実が判明しました【図5】。

棟札には、建築当初の家主であった細田半三郎の名前に加え、大正15年（1926）6月30日に棟上げが行われたことが記されていました【図6】。本調査に協力いただいた山崎鯛介氏の指摘によれば、昭和2年1月の土地取得時期と合わせて考えれば、大正15年には竣工し、完成と同時に登記を済ませたとみられるということです。従って、通説より4年ほど遅る大正15年が高富家住宅の本当の竣工時期ということが、明らかになりました。

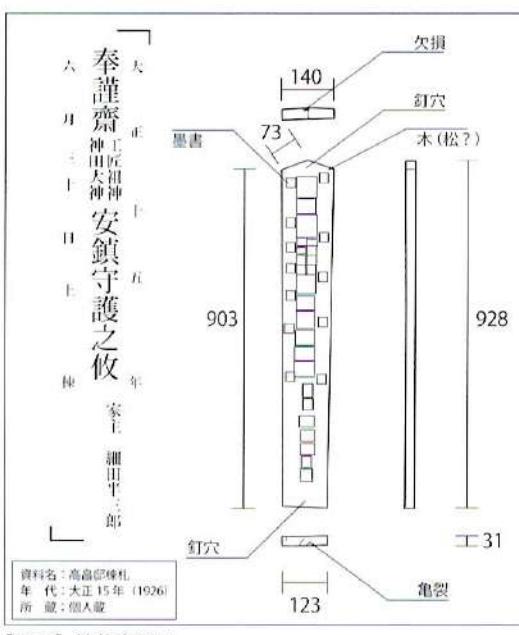
#### ◇ 謝辞 ◇

本件の調査に当たり、東京工業大学博物館の山崎鯛介教授（千代田区文化財保護審議会委員）の御指導を頂戴しました。この場を借りて感謝申し上げます。

（学芸員 山田将之）



【図5】発見された棟札



【図6】棟札実測図

### 千代田区の景観まちづくりの取組み

区では、高富家住宅を区の景観上重要な建造物として、平成15年6月に千代田区景観まちづくり条例に基づく「景観まちづくり重要物件」に指定しました。さらに、令和4年4月には、景観法に基づく「景観重要建造物」への指定も行いました。

今後も景観まちづくり重要物件等への支援を継続していくとともに、新たな物件の指定に向けた取組みを進めていきます。

（千代田区景観・都市計画課景観指導係）



【図3】主屋座敷の床の間



【図4】柱脚部分の耐震補強  
柱脚部をボルトや方材で補強している

# 河鍋暁斎画「日課観音図」を観る



【図 1】全体と各部の名称

10

今回紹介する資料は、旗本小笠原家に伝來した資料群の中からの1点です。小笠原家については、平成24年度に『千代田の古文書2—御上洛御用留 旗本小笠原家資料 他一』として報告書が刊行されています。令和4年4月、この報告書にも掲載されている屋敷図や家譜も含め、全84点の資料の寄贈がありました。寄贈資料の中には、これまで知られていなかった近代の掛軸や扁額も含まれており、明治維新後的小笠原家の交友や関心を紐解く資料となることが期待されています。左に掲載した掛軸【図1】は、その内の1幅である観音図です。

## 保存状態と表具

この観音図は紙（紙本）に墨を使って描かれています。画面に大きく折り目がついてしまっていますが、虫損やカビ、目立った変色は見られず、保存状態は比較的良好だと言えます。

掛軸の表装にはいくつか種類がありますが、この資料は仏画表具と呼ばれる形式です。名前の通り、主に神仏や高僧などを描いた際に用いられます。

風帯と中廻しには、百花の王と称される牡丹を大きく刺繡した緞子が用いられています。

軸首や端喰には蓮華模様の彫金【図2】が施されています。蓮華は仏教画によく用いられる植物です。軸首には一般的に木や象牙を削って用いられますが、蒔絵や堆朱などの工芸品が用いられる場合があります。現在は掛軸の表具用の彫金を行う職人の数が減少し、



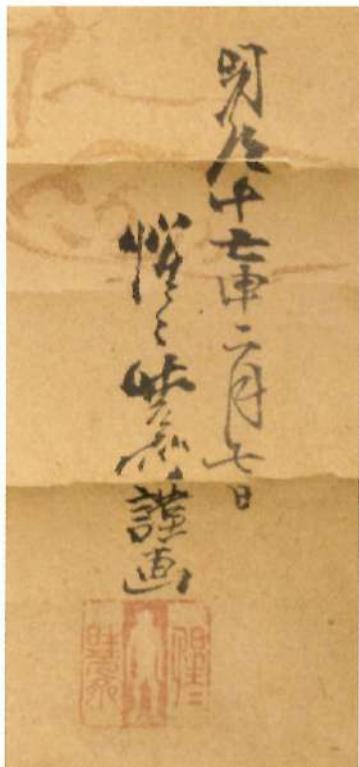
【図 2】軸首拡大

国内で掛軸に関わる彫金を行っている人は数人だと言われており、制作された時代を反映している要素だと言えるでしょう。

## 落款と画題

落款【図3】には墨書で「明治十七年二月七日 惺々晩斎謹画」と、陰刻の人型と陽刻の「惺々晩斎」を組み合わせた朱白相間文の方印があり、絵師・河鍋 晚斎（1831-1889）の作品であることが判ります。晩斎は「その手に描けぬものなし」と謳われた世界的な知名度を有する画家で、作品は多岐に亘り、千代田区の指定文化財になっている幕絵「舞楽蘭陵王図」【図4】もそのひとつです。

画題になっているのは観世音菩薩の坐像です。晩斎は明治期に入ると日課として観音や天神などの道釈人物図を描いており、光背と蓮台を木版で摺って【図5】、そこに立像・座像など様々な尊像を描いた作品を残しています。晩斎作品には依頼や展覧会出品のために描かれた観音像もあり、本資料はそれとの差別化を図るため、通例に倣って「日課観音図」という名称を用いることにしました。



【図3】落款



【図4】河鍋晩斎画「舞樂蘭陵王図」



【図5】蓮台部分拡大

「信仰」に関わる掛軸・掛物は一般的に民俗資料として分類されますが、この掛軸を小笠原家ではどのように使用していたかは判明していません。一方で千代田区の美術史上では、先に挙げた「舞樂蘭陵王図」と共に、東京中心部における晩斎作品の需要を考える上で注目に値する資料です。また晩斎は幕末には神田塗師町の三谷家とも交流があり、長期に亘って千代田区との関わりがあることから、江戸から東京への移り変わりを考察する上でも糸口となる画家です。同時に小笠原家旧蔵資料の書画の多くは家との繋がりの中で収集されたものもあるため、他の資料との関連性から歴史資料としての興味深さもあります。

### ◇ 謝辞 ◇

本文の執筆にあたっては、足立区立郷土博物館学芸員の小林優氏に御協力を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

(学芸員 井坂綾)

# こんなこともやっています～社会科見学への対応～

小学校3年生の社会科の授業の中では、「むかしの生活」について学ぶ单元があります。その中では、博物館施設に赴いて古民家を見学したり、実際に昔の生活道具—氷冷蔵庫や炭火アイロンなどに触れたりすることができます。文化財事務室でも、教育普及事業の一環として小学校の社会科見学の受入れを行っています。

社会科見学では、常設展示の見学と実際の資料に触ってもらう体験の2つを軸にしています。千代田区には学校から寄贈された資料も多くあるため、その中から見学に来た学校に所縁のある資料を見てももらうこともあります。今年5月に実施されたお茶の水小学校の見学では常設展示の解説の他に、令和元年から始まった同小学校の校舎の建て替えに伴う発掘調査の様子を解説するなど、学校ごとの特色のある内容で実施しました。

(学芸員 井坂綾)



## 常設展示の展示替えを行いました

10月18日(火)から常設展示IV室とV室の展示資料を一部変更しました。また、テーマ展「千代田の煉瓦建築」(～令和5年2月19日まで)が始まっていますので、ぜひお立ち寄りください。

## ホームページがリニューアルしました

セキュリティを強化し、「誰もが使いやすく、わかりやすいサイト」を目指してデザインも一新しました。新しいURLは下記のとおりです。QRコードからもアクセスすることができます。<https://www.edo-chiyoda.jp>



都営地下鉄 ●三田線—「内幸町駅」徒歩3分  
東京メトロ ●千代田線  
●日比谷線 —「霞ヶ関駅」徒歩5分  
●丸ノ内線

駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 10時～22時

土 10時～19時

日・祝 10時～17時

文化財事務室 月～金 10時～18時

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。

最新情報はホームページ等でご確認ください。

休館日 每月第3月曜日

文化財ニュース 第28号 (3,000部)

発行日 令和4年11月29日

編集 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室

〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4

TEL: 03-3502-3348 FAX: 03-3502-3361

e-mail: bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp

発行 千代田区教育委員会

印刷 日本印刷株式会社